



陶韻クラブ

第13号

ふれあいの旅 決定

今年のふれあいの旅の場所は津軽金山焼に決定しました。

月日は7月27日（日）

日程は、朝8時に公会堂前を出発、金山焼を中心に見学して帰りは17時頃に三沢に帰る予定です。費用は一人五千円（昼食代含む）程度になります。参加者の申込締め切り7月11日（金）とします。

新入会員 2名

6月から加藤早苗さん、板垣美瑛子さんの2名が入会しました。お二人は陶芸経験が豊富でクラブ員ともお知り合いの方が沢山います。教室を終了してから入会ではなく、会の目的に賛同し、会則に基づき代表が認めた者としての入会です。早く会の雰囲気慣れ、会員との交流を深めて楽しく活動していきましよう。

社協まつり参加

4月の総会で説明しましたとおり、45周年の行事の一つとして9月の社協まつりにチャリティーとして参加する予定です。

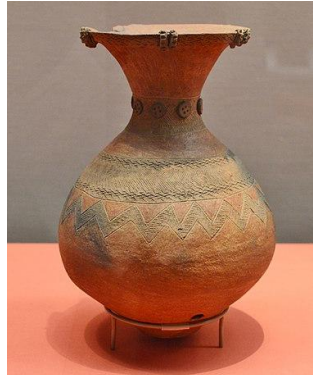
この取り組みは、栗澤先生の教えと会の方針である「陶芸活動を通じ、社会福祉のために貢献する奉仕活動」に基づいています。具体的には、販売可能な作品を多数制作していただくことをお願いいたします。会員の作品が少ないと、参加しても寂しいものになってしまうので、皆様の協力が必要です。

粘土の選定 決定

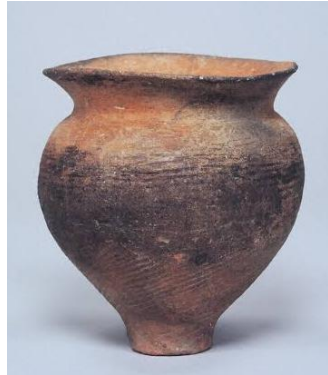
今後使用する粘土が決まりました。4月以降、様々な種類の粘土を試してきましたが、5月30日に入荷したシンリュの赤8号の試作結果が良かったです。特に可塑性（作りやすさ）と焼きの色味が良いので、当面はこの粘土を使用していくことに決めました。

焼き物の歴史2

やきものの歴史の第2回は弥生土器と須恵器です。1 弥生土器
弥生時代（紀元前10世紀元後3世紀）に作られた素焼きの土器です。



縄文土器と比べて薄手で硬く、赤褐色を帯びた土器で、無文（文様のないもの）もしくは幾何学的な簡素な文様が特徴です。焼成温度も縄文土器より高めです。弥生時代には、水稻農耕が本格的に始まり、日本



各地に伝わりました。土器の形状も縄文土器と比較して米の保存・調理に適した実用的な形状となりました。

2 須恵器

おおよそ五世紀頃、大陸から渡来した部族により輸入された技術で、大阪の堺市付近が発祥地です。はじめて本格的な構築窯で焼成された焼き物で、今迄八百度位で焼かれていたものを千度、あるいはそれ以上という高温で焼くことができるようになりました。



須恵器の特徴としては、色は灰色（青灰色）を帯び、縄文土器等と比較すると硬く焼きしまっており、保水性に優れているところ。反面、耐熱性はあまり高くありません。窯の中で焼かれると

き、燃料の木の灰がふりかかって、素地の上にガラス質の被膜ができました。これが釉の始まりで、自然釉といいますが、その後、須恵器も意識的に木の灰の釉をかけたものも生れ、鎌倉時代になると美しい陶器が、尾張の瀬戸地区で焼かれるようになりました。



一方、焼け易い粘土を用い、釉をかけずに素地を焼き締めて作る妬器質（せつきしつ）タイル質）のやきものが、滋賀県信楽、丹波の立杭、越前の織田、岡山県伊部（備前焼）、愛知県常滑で盛んに焼かれました。瀬戸を含め以上のやきものの窯を「日本の六古窯」といって、やきもの愛好者に喜ばれています。